京交山岳部報

No. 387　　'85　1月号

〔第1519回例会〕　集合！　初春年男

牛松山　(R)

日　時　1月6日(日)　京都駅8:29　二条駅8:40　嵯峨駅8:50

担当者　九条　田中忠久(TEL 2351)　申込み〆切　4日(金)

備　考　当山岳部には丑年の人が多いと聞いています。是非この機会に集合して下さい。幾代かの年男が揃ったらすばらしいと思います。もちろん丑年以外の人も大歓迎です。山を下りて小島・嵐山店で新年会をやりましょう。

〔第1520回例会〕　冬山トレーニング

伊吹山　(T)

日　時　1月12日(土)～13日(日)　13時　みぶ交通局前集合

担当者　烏丸　大倉寛治郎(TEL 2343)

備　考　冬山装備一式　テント泊で行きます。

〔第1521回例会〕　辻 久雄氏退職記念登山

奥比叡　水井山 794m　(R)

日　時　1月27日(日)　北大路バスターミナル　8時集合

コース　北大路ー登山口…横高山…水井山△…仰木峠…横川中堂…坂本ー京都

担当者　高速　岡田茂久・出海洋三(TEL 3286)

費　用　参加費(1,000円)又は記念品料(500円)は事務局　三橋(TEL 2215)まで。

備　考　ワカン、アイゼン必携で雪上ハイクを楽しみましょう。

新年会兼集会

1月　6日(日)　嵐山「小島」　861−4588

企画運営リーダー会

1月23日(水)　三橋宅

コッテ牛のたわごと

岡田茂久

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

『天地の間に求めるものは何もない。飯に会うては飯を喫し茶に会うては茶を喫するだけだ。飯来たれば飯を喫し昏時来たれば眠るだけだ。腹がへったら飯を喰い眠うなったら寝るだけだ。…仏法にはなんの跡かたもない。本来の自分の心が分かりさえすればよい。』

友人の和尚が1冊の本を勧めてくれた。タイトルに「禅の悟りにいたる十のプロセス」とある。前妙心寺管長の山田無文老師の著「十牛図」である。

師走を前にしてやっと完読した。完読したといっても自分のものにしたのではない。やっとこさ字を数えたようなものである。我々煩悩の塊りの様な輩にも判かり易く説いていただいてはいるが、その床流は非常に難解なものではあった。それでも〝禅〟というものの輪郭がおぼろげながら判ったような気がする。気がするだけで人様にこんなものだと説明なんぞはできない。自分の都合のよいことばを自分の都合のよいように解訳するだけである。『自分の心さえ分かりさえすればよい』と老師も悟していて下さる。

「十牛図」とは〝禅〟の修行について、本来自分は煩悩具足の凡夫と考えるとすでにそれが迷いのもとであり、それを越えたものが〝悟り〟である。しかし本当に〝禅〟の判ったものは〝禅〟さえも忘れてしまう。悟ったことを悟っていたのでは〝悟り〟ではない。何ものをも超越して〝無〟となるのが〝禅〟の極意である。その修行の過程を牛飼いがコッテ牛を飼い慣していくのに倣って十の牧牛図を描き、修行度に従って説いていくのが「十牛図」である。〝禅〟ではこの牛が人間の心そのものを表わすことになっている。

1冊の本を読んだだけで〝禅〟が判かれば、あの達磨大師が岩壁に面って九年間も考えてはおられない。ダルマさんといえばこんな註がある。

中国古代〝梁〟の国の〝武帝〟が達磨大師に対してこんなことを問うた。『私は寺をたて、僧を遇しているどんな功徳があるか』。達磨大師は一言『無功徳』と答えたそうである。人々の役にたつことをした。善行を積んだ。しかしその功徳をいささかも期待してはならない。人の為に尽す善行ということは、自己犠牲〝無〟の境地で行うもので、それに対し何か報われることを期待したり、人々から賞賛されることを望むことはその行為そのものが偽物であるといったのである。

この事は我々の日常でもいえることで、山行の折などに装備の準備をしたのはオレだ。食糧の買出ししたのはオレだ。世話をしたのはオレだ。それなのに他の連中はあたりまえの顔をして…。

ついぐちることがある。我々〝禅の心〟は知らず、〝悟り〟などは雲の彼方の話である凡夫ではいたしかたないことではある。しかし煩悩具足の凡夫の心を哀れんで一言の声をかけていただけばど

んなに躍如することかと思うこともある。何をするにしても誰かがどこかで何かの世話をしているのである。ありがとうの感謝の心は忘れないようにしたい。

ともあれ今年は私にとっても何回目かの当り年である。「十牛図」にちなみ牛の歩みに似るかもしれないが、あせらず一歩一歩マイペースで登山を続けたいと思っている。どうか今年も安全登山を目標に、山田無文老師の冒頭のことばの後に『山があったら登るだけだ』のことばを継ぎ、山を登るに理由はいらぬ『本来は自分の心さえ分ればよい』山が好きだから登るので、〝無〟の境地で大いに山を楽しみたいものである。しかし今年も〝禅の心〟にはほど遠く色々の煩悩に迷い惑わされる年となりそうである。

第１５０４回例会　　中国山地

大万木山　琴引山（頓原）　女亀山（赤名）

伊　藤　潤　治

この例会は、ＪＡＣ岐阜支部でも活動家ぞろいで知られる大垣さんから藤井茂雄・石原順次・小西利雄の三氏のご来援をいただき、極めて充実せる山行になり幸甚であった。

９月１４日　１９時４０分すぎ、私と三橋君は名神・京都深草パスストップで藤井さんの車に拾われた。これは三橋君が思いついた大垣さんとの合流方法。先づ成功例第一号ではなかろうか。このメンバーは昨年７月登頂した糸瀬山△１８６７m（上松）のものだが、藤井さんは６００山、石原・小西のお二人はともに５００山登頂ご達成近いご自慢会の優等生殿である。

中国・加西ＳＡでちょっと休み、七塚原ＳＡに２３時３５分着、連休で殊の外にぎわう中、藤井さんは愛車、石原・小西のご両所は芝生の上、私と三橋君は休憩所で仮眠。

９月１５日　5時２０分、七塚原ＳＡを発ち5時３０分、中国・三次ＩＣからＲ５４号線に出て頓原町に向う。登欲をそそる山を左右に見て、赤名隧道を抜けて頓原町には琴引山に出迎えられて入った。頓原町では琴引荘に寄り、今夜の宿泊の確認をし、補装の細道を大万木山登山口に行く。門坂谷と位出谷の分岐にきて駐車場へは相当な悪路のようなので、その地点に駐車し、滝見コースをたどった。この山について日本山嶽志（１９０６年刊）は、大萬木（オオヨロギ）山、別称土手山（ドテヤマ）、出雲国飯石郡　備後国比婆郡ニマタガル。飯占郡吉田村大字吉田ヨリ十六丁（或云二十六町）ニシテ其山頂ニ達ス、標高四千十九尺と述べ、世界山岳百科辞典（１９７１年刊）には、大万木山（地名）広島・島根県境の道後山山地に属する山で、標高千二百十八メートル。クマザサ・ブナ・クロモジなどの樹林や藪で登山道も消え一般の登山の対象としては不適である。と記されてある。

この度小西さんのご用意下さったリュックをかついで広島の山歩き（１９８１年）によると、「近年頓原町の努力で島根県側に登山道が開かれた。開きすぎの感がなくもないが、頂上一帯は公園化されている」とあって、一般向きになったのを惜しんでお出のようである。

それはともかく頓原町からもらった「林内案内図」に私は文句をいう気はない。私たちの滝見コー

スを「林内案内図」は、権現滝から地蔵尊にかけての森林は薪炭林跡地の名残が強く（炭焼窯跡も残っている）林相的には稍々貧弱だが、クリ・カエデ・ナナカマド・ヤマザクラ・コブシ・シャクナゲ・シラカバ・トチ等が樹木名標付で植栽してあるので、樹の名前を覚えてやって下さい」と楽しめるように希望してある。

バラスの深い路が駐車場で終ると歩道ぞいの斜面は双方とも下草が伐払われ、見るからにすがすがしい樹林にかわり、私たちは露を宿した緑草に、ツリフネソウの紫花群やホトトギス・ミゾソバミヅヒキ等がかれんに乱れ咲くなかを、あれこれ賞でながら進んだ。滝見コースの滝は権現滝というようだが、布引型三段の優美な約１０ｍの可愛いい飛瀑、欲をいうなら滝壺がほしい。

滝から間もなく右からの小流の谷、そこの左方にシラカバを植込み、屋根を尖らした洋風の小屋が建っていた。いろいろ配慮のみえる好景だった。やさしい瀬音に時折り小鳥の声がまじる静かでゆるやかな道は、やがて谷を離れ左右につづいた美しい樹林とも別れ、茂った雑林に囲まれたむし暑い登りに変り、どこにあったのか「一服岩」にも気づかず、地蔵尊の祠についた。

祠にはいかにも慈悲深い尊顔の石仏がお祀りしてあった。私たちはその祠前を拝借して姿のほんやりとした等検境△９１６ｍと門坂△９７５ｍ（点名）や、眼下からここを目指しているような車道の新設等をながめて少憩。そこの案内標は「湧水へ一粁、頂上へ一・四粁」だが、見上げるような急坂であったからこれはきっと登りだ、と思った。しかし私たちは好調で１０分も歩くと「すばらしい大万木」の木札があり、ブナの巨木が点在しだし、道端の蝦をうごめかすなど、また１０分くらいでかすかな水音がきこえ「湧水（四季を通じて７Ｃ°の水が出ている水飲場）」についた。

この頂上近い高所の水は実に美味だった。大袈裟かも知れないが、この水の一掬だけでも大万木登山の価値は十分であると思った。すぐ柴囲いの小屋があって扁平頂になり木立を抜けて小さい草っ原に出る。そこが大万木山Ⅱ△１，２１８ｍ（島根はオオヨロギ、広島はオオマンギと呼ぶ）の山頂だった。

ちなみにこの山の測量は、昭和４８年８月１日　偏心点をもうけ次の山々と行われている。

1. 門坂Ⅳ△９７５ｍ。　2. 鉄屋Ⅲ△１，０５１ｍ。　3. 猿政山Ⅰ△１，２６８ｍ。　4. 城山Ⅲ△６７４ｍ。　5. 熊山Ⅱ△１，０１９ｍ。　6, 三国Ⅲ△１，０５６ｍ。　7. 船山Ⅱ△９４０ｍ。　8. 指谷奥Ⅲ△１，４８ｍ。　9. 草ケ城山Ⅲ△９７６ｍ。　10. 琴引山Ⅱ△１，０１３ｍ。　11. 都加賀Ⅱ△７８６ｍ。　12. 沖ノ郷山Ⅲ△９５７ｍ。　13. 島屋ケ丸Ⅱ△６８６ｍ。　14. 栃山Ⅱ△６６４ｍ。　15. 等検境Ⅲ△９１６ｍ。（５. 上布野・　１３、１４. 木次、他は頓原図）。

この１５座の内、草ノ城と琴引山はこのあと登頂するのだが、猿政山は１９８０年１月１３日、わが方は松浦勇次・河村敏夫・高塚ひさえのメンバーで、あちらは玉岡憲明・信谷政治・和田多規江の新宮さんメンバーで、白雪に輝やく稽と一等三角点の頂きへ劇的な入れ違い登頂だった。入れ違いといっても顔を合わさずコールの交換だけであった。そのあと私たちは、高野町で旅館の違約にあい大万木登山断念の思い出がある。

だからこの大万木山の登頂は感慨無量である。大垣さんたちに記念写真をお世話になったあと「リックかついで」の「急傾斜でいきなり階段があって泣かせる。途中巨岩の下に朽ちたほこらがあ

り大万木神社と書いてある。拝座する場所もないほどの傾斜地である」権現コースにつく。

そのご案内の如く道も祠も急峻にあった。祠は約1,040m、亀頭岩（北の守神）が約950m地点。かっては七日迷いと恐れられた大万木山らしいが、今は「頓原町立山岳公園」のようだから、半日たらずで悠々とした安全登山を楽しませてもらえ、ありがたい事である。

大万木を下山、ただちに車を草峠（くさんだわ）に向けてもらう。その道は頓原町宇山から高野町木地山へ越えているが、地形図には一部になっている。山に入っても舗装路で一同が感心していると地形図未載域になり地道に変った。

おきまりのような荒れた路面、目まぐるしい曲路、こんな悪路へ場違いの高級車に5名と装備を満載で乗込んだのだから底がこすれてたまらない。凸凹群が恐し見え、藤井さんには申し訳ない思いで一パイだった。藤井さんから分岐点で〝どちら〟と声をかけられて、私は地図読みを怠っていた事に気づいたが、とっさに右折が有利と判断できず草峠に上ってもらった。

そこで指谷奥Ⅲ△1,046mと目が合う、気になる山である。峠は掘下げられた左の壁に祠がはめこまれ、大万木山からの立派な縦走路もきていた。草ノ城山へは生え込んだ県境に踏跡があった藤井さんは流石にお目が高い。指谷奥へ盛んに登欲をおもやしであった。県境稜を1,005m上あがる。そこでもし草ノ城山が見えていたら私たちは、指谷奥に背を向けなかっただろう。左折した町界尾根は間もなく頓原町斜面の伐採地に飛出し、それを下ると前述した右折の林道がきていた。

しかし草ノ城山△976mは、この伐採域を尻目にして根曲り竹のしげみを分け入った、ブナの木立の並ぶ峰にあって本当によかった。しめっぽい山霧に包まれて昼食をとったが、緑の織なす重厚なさまざまは、大した深山に座している気分にひたれ、この草ノ城も、またいい山であった。

満悦のうちに草峠にもどったのだが、指谷奥を見ると、やはりこっちの方が、そんな未練をわかしてしまった。

琴引山を「出雲風土記」は、この山の峰にいわやあり、うちに天の下造らしし大神の御琴あり、とのべ、大国主命が琴を弾じて国しずめを行った琴弾きの古事による琴引山であると、神話のお国柄ぶりの命名を伝えている。日本山嶽志の琴引山は、「別称弥山、出雲国飯石郡ノ南方ニアリ、来島村大字野萱ヨリ二十町ニシテ其山頂ニ達ス、標高三、三四五尺」となっている。

この山に私たちは、この日三山目の足を運んだ。空模様が明日の天気を心配させ、頑張らしたのだった。頓原町で車にガソリンを充たし、R54号線と佐見で別れて「琴引山林間キャンプ場」道に入り、シーズンオフでガランとしたキャンプ場、標高約550mにつく。14時25分であったが雲が厚く嫌な暗さに誘われて睡眠不足が疲労に重なったのか、出発準備が妙におっくうだった。

コースは、街道のように見事な松の立ち並ぶ樹間の「山頂（2,320m」標からはじまる。幅広いゆるやかな林間歩道を約10分で「山頂へ1,820m」標。

やがて気合が入り道も山らしくなったが、とうとう雨になる。歩きはじめから約40分、おおよそ850m地点で谷をまたぐ、その谷水は急行に加えて雨具着用のほてりを冷やすのにうまく役立ってくれた。そのあと20分で、琴の岩屋、地元で琴穴とか穴神、あるいは大国主命の墓所等と称されている。琴を秘めているという窟への道を左に見て、岩をめぐらし厳かにご鎮座である琴引神社

に詣うで、野萱道とも合い、めでたく琴引山Ⅱ△1,014mの頂きに立てたのであった。突出して遮るものない磐上でも展望は相憎だったが、私たちはたゞうずくまっていられるだけで充分だった

この山のまたの名に弥山があるのは、云うまでもない琴引の神への篤き信仰のあらわれであり、今もって、ちり気（ひきつけ）封じのため、幼児を背負って登拝するならわしが伝承されているそうだ。いつの世でもわが子の幸せを祈る親の願望の根強さはかわるものではないが、弥山の名称にはこれらの欲求を満たす、ほのぼのと心ぬくめる信仰がこもっているようだ。

私たちも琴引の山頂へ持合せた山海の味覚を供え、家族の健やかなる幸福を断念して祝盃をあげ感激にひたったのであった。頓原町に下山し琴引荘の途中に頓原名物の店があった。名物とは軽く一口で食せるほどの頓原饅頭と琴引饅頭だが、その他の名物で遊ぶのも旅のおかしさ、たのしさである。琴引荘は知らずに泊ったが、赤く濁っていた湯は鉱泉であって、実は頓原温泉の名もあたるのである。山菜料理もよかったが生ビールがジョッキーで出てきた事と、玄関の油絵「沖の郷山」は忘れられない。

第二日は、琴引山は取越苦労でしたと、笑われているような目映ゆい朝ではじまる。琴引荘の朝食をすまし6時２５分、沖の郷山にさようならをしてＲ５４号に出ると、琴引山の目迎目送がある。山容は足跡をしるした故か、昨朝より冴えて秀麗であった、が私はそれよりも先頃機会を逸した山毛欅ケ平山（鷲崎）と文字は違うても武名ケ平山がこの沿道にあり、その武名ケ平はどんな格好の山で気に入るルートを持っているのだろうか、と盛んに気になっていた。

しかし立寄る余裕があってせっかく心にとめた武名ケ平山であったが、山姿に接して俄かに登欲を消失、悪いと思ったがそのまま女亀山に向う。

赤名隧道で出雲国から備後国に入り、女亀山への破線路を５人の眼で求めていたが、捕まえられずに室の家並まで下っていた。この見落しが郷土史家金本翁を引合せ、「女亀の山名は、祭神が女性だから女神の転訛だろう」「女神は鉄（たたら）に崇敬されていた」「女神の沐浴を伝えていたかっての底なし池の話」「山頂では祭祀（７月１５日）が不便になって、祠（尾股久久能智命、奉再建女亀神、尾股豊受姫命）を関所跡近くに移した」「破線路は関所跡、祠からだが少し入れば通行不能だろう」「登路は、山岡梅市太夫に教えを乞うよう」等の大収獲をもたらしたのであった。喜び勇んで私たちは横谷の山岡太夫を訪問すると、〝この道の先に檜を積む所がある、そこからが歩き易く、一時間もあれば登れるだろう〟といろいろご説明下さった。

教えられたルートのアプローチには、「アサドのソネ」コースがらしいのだが往復ともその取付点は確認できなかった。山岡太夫がおっしゃっていた距離を過ぎてもそれらしい所が現れずいぶかりながら作木村地内に入ると架線場跡があり、ここの事かと一旦は駐車したが、登山口はなお先の御大典記念林の檜を積出しているナシノカ谷であった。

駐車は作業地点下流右岸林道沿いにできた。山の神のお祭りにオコゼは欠かせない大事な供物のようであるが、藤井さんはこのオコゼを意識され、はるばる新品登山靴を本日の女亀山にオコゼとしてご用意であった。流石である。私もこんな楽しい豊かな心のゆとりを何とか育てたいものだ。

皆伐された明るい斜面下につき、作業中の人に声をかけた。この人たちには正直な話、登山者の

立入りは邪魔だろう。不機嫌に作業域外の藪地を通るよう指差していた。云われるままに歩いて危険の及ばなくなった西側伐採境界尾根に上った。右足下の殺風景には言葉がない。そのために急坂つづきよりも、日ざしの厳しさに閉口、早々日陰に逃れて冷気にひたった。

その後もなるべく日陰や風のあるような所を縫うてたどり、伐採上限線へ登りつく。そこにもちゃんと道があって、すぐ西南尾根720mにのる。この北斜面がまた伐採地だが、ここはいたわるような涼風をみなぎらせ、日陰をかざして迎え入れてくれた。

疎林の登りは小鳥の声がきこえたり、獣の足跡がしるされていたりする急坂を経て、笹地を詰めると、素朴な祠「天御柱、国御柱、奉新建女亀神社。信徒総代人、三上延三郎、三上春太郎、谷川穣、鮎川房十、黒川亀市、（昭和27年札）」。「大正5年11月30日建之、永妻常市外氏子中木挽、伊達亀太郎、岡田長作。発起人、迫康太郎、森脇勘太郎。大工、野田仁太郎、上川兵太郎。」があって額突き、一等三角点の標石地点に至った。I△830mは高い木立をめぐらし森閑と心なごませ、こよなくくつろげる平頂である。「芸藩通志、備後国三次郡」によると、女亀山池、岡三淵村にあり。池は頂きにありて四時水涸れず、神亀これに居る。里人雨を祈るに杭を池中に立つという…。とあって、信じられないがこの平頂は、かっては池面であったようだ。

それで祠を山頂に祀れなかったのだろうか、いろいろ多くの謎を秘めている女亀山である。往路を下山し女亀山を仰ぐと白雲が綿帽子のようにのっていた。ふと男亀山があればよいな、と思った。

第1511回例会

奥美濃　越山と能郷白山

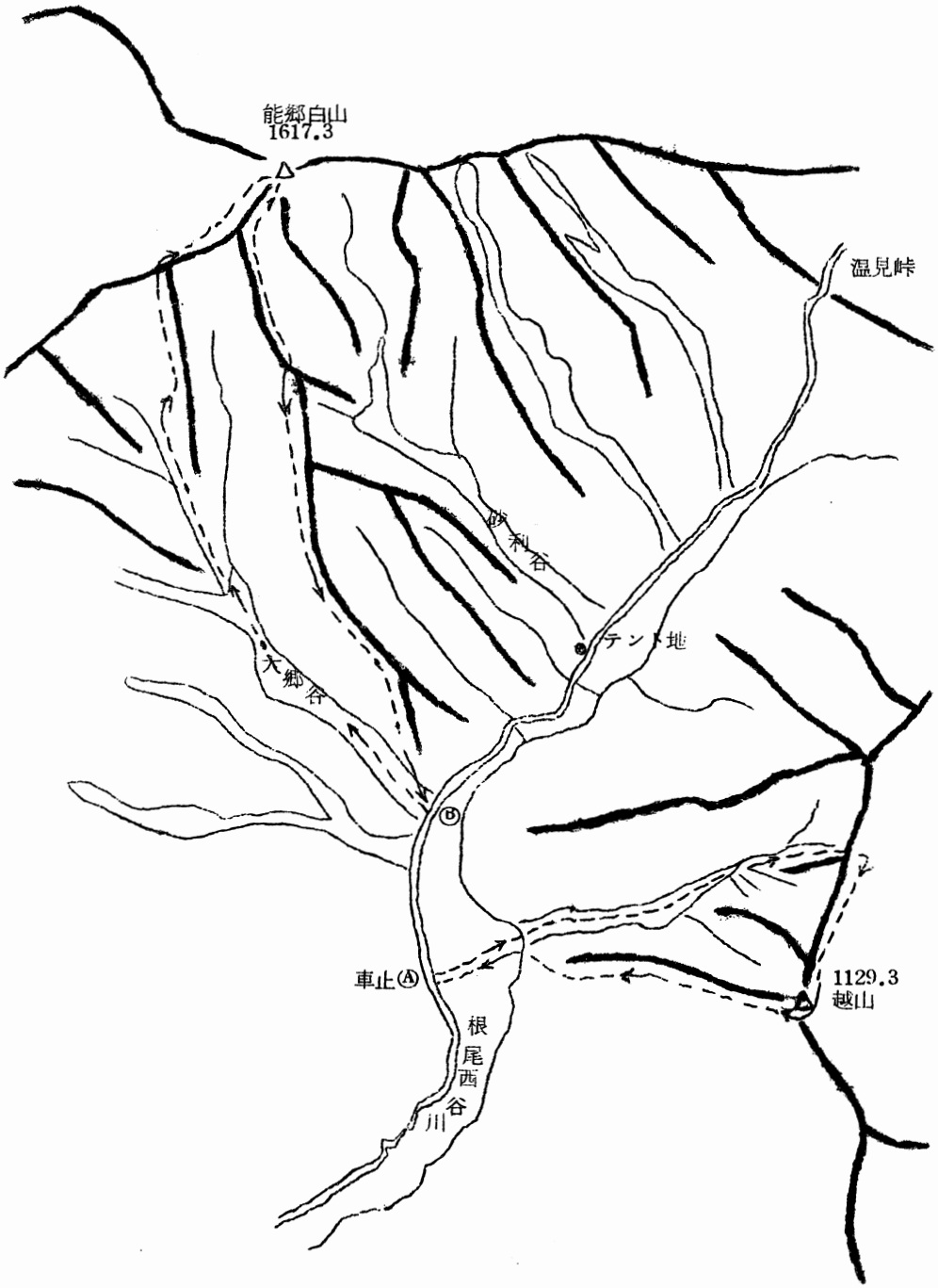
大槻　鑒弘

11月3日

越山への道程は長かった。能郷と黒津間の道路工事のため、越山へ登山すべく根尾西谷と越山谷の分岐点に着いたのは、京都から4時間半を要した。そこは秋「絶紅潮」であった。

どこを見渡しても、秋、秋、秋。なんと素晴しい紅葉か。本来なら能郷から黒津まで30分程で着くところが、根尾東谷川をつめ越田士から折越峠を越えて越波を廻り、そこから須合を経て黒津まで戻り大河原まで入らねばならなかったので1時間も遠道になった。このことは、前もって根尾の土木事務所へ大槻貞従氏より問い合せをしてもらっていたので予想はしていたが、長い遠まわりであった。登山仕度をして出発したのが11時15分。すぐに広い河原に下り立ち根尾西谷を横断して、越山谷に入る。すぐに堰堤があって、その堰堤が階段状に9段続いている。その最上部で昼食とした。天気は良し、景色は良し、こんな所でのんびりと昼寝でもしたいところだが、秋の日短い。先を急ぐ事にする。昼食後、全員読図の勉強を兼ねて登山することにし、現在地のポイントとこれから目指すルートを決め、地図上で追う。ルートは越山谷をつめて、越山の一つ西のピークの尾根を登り、東に振って三角点へ達するルートを選ぶ。先週は、静原で踏査競技会に参加したこと

もあって和田氏にトップをお願いして出発する。



出発して、まもなく今まで伏流だった谷に流水が現れるようになった。4本目の谷の分岐を見送り、2段5mの滝を乗越して三俣に出合う。この地点から谷と別れ左岸の尾根に取付く。遠方より眺めていた時はそうたいしたヤブではなく、疎林に思えたが中に入ってみると、なかなか、やはり奥美濃1級のヤブである。時折、地図とにらめっこし、現在地点を確認しながら進む。ますます、ヤブはひどく稜線近くでは猛烈な根曲竹が歓迎し、手、首に相当ひっかき傷の洗礼を受けた頃、やっと稜線に出る。稜線に出れば歩きやすくなるだろうと思ったが、思いは外れ、なおヤブはひどくピーク手前の鞍部までは相当なものであった。鞍部で一息入れて、80mの高度差の三角点までそこから1ピッチで着いた。人が多く訪れる山でもない、奥美濃でも物好でなければ近寄らない三角点はひっそりと藪に囲まれてあった。展望の良い山と言うことが本に書いてあったが、その当時より木々が繁ったのかまったくヤブの中。しかし少し北へブッシュを漕いで出ると展望は開けた。西から白山、北アルプス、乗鞍、御岳と思わず喊声が出る。もう初冬のその山は峰々が白く輝いていた。三角点に戻り、下りのルートを南に延びる尾根を下ることにしてこのヤブ山を後にする。

やはり下りは楽でブッシュもそうひどくなく、踏跡もあって所々ナタ目もある。このルートは三角点に直接登るには近いので案外利用されているらしく、我々は一気に50分で第1堰堤に降り立った。その夜は、砂利谷の出合でキャンプを張り、キャンプファイヤーと満天の星を友に一時を過し、心地よい酒の酔に助けられシュラフにもぐった。

能　郷　白　山

上　島　和　彦

11月4日

砂利谷のキャンプ地を後にして大郷谷の出合いまで戻る。谷の流れが林道を横切っている。気温は0度、水溜りでは氷がはっている。今日はこの大郷谷から登るということで、左岸に沿って廃道になっている（2～3個所赤ペンキのマークはあった）踏跡を辿る。大郷谷5号堤とプレートに刻まれた堰堤を越したところから谷へ下りる。水飛沫で濡れている岩々は凍ってツルツルになっていて処々足を滑らせ乍ら登る。何回かの息を整える小休止を繰りかえし、ようやく調子もでてきた。元気に狭くなってきた谷を登っていた時、突然右手から風を切る落石の音。先行していた古市さん大槻貞さんから「ラク」の声が同時に発せられた。丁度、谷の芯を登っていた和田さんの約50cm程　後方を掠めていった。時計は8時45分、一同胆を冷したが緊張しつつ登り続ける。谷に水が無くなる辺りで背の高い枯草の茎にまるで虫が卵を生み付けた様な形をした霜柱が付いていた。毛細管現象とかで出来るそうである。この辺りから左岸の斜面に取り付き尾根を登る。その斜面はガレていて浮石が多く気を配りながら石を踏み抑える様にして慎重に通過する。さていよいよお楽しみの美濃の藪に突っ込む。茨や密生した石楠花や背より高い根曲りで顔や腕に引っかき傷をつくりながら苦闘する。もうこの辺りまで登ると昨日の越山は下に見える。やっとのことで稜線に出るとそこは能郷からの登山路で折から下山してきた愛知の4人のパーティーと出会った。彼等は、私達が大郷谷から藪漕ぎして登って来たと知り驚き呆れていた。稜線から見る頂は雲一つ無い青空の下

輝いて見えた。道端の日陰では、数日前に降った雪が溶けずに残っており初冬を感じさせ、凡そ20分程の登りで山頂に着いた。早速6人が大声で万才を三唱する。

頂上には10年前に当時部員の皆さんによって建てられた標柱が健在であった。昼食のあと、雪を被った手前から御岳、乗鞍、北アルプスの峰々、更に左に目をやると加賀の白山が美くしく、時間の経つのも忘れて眺望を楽しむ。11時20分下山にかかる。白山権現の社で記帳を済ませて快調に下る。登って来たコースからは2本手前の尾根を降りる。下りの方が登るより幾分良いが仲々手強いルートで蔓が多くザックや足に絡み苦労を強いられる。途中の手強い個所を通過した辺りで一息いれ熱い紅茶に疲れを忘れ紅葉の谷を楽しむ。そこからは大郷谷を飛ぶ鳥の群を下に眺められた。その後、何回かの下降方位の修正をしながら朝の登り口に降りることができた。最後に大郷谷の谷水を呑み、その美味しかったことで今日一日の苦労したことと疲れを忘れることができた。

〔参加者〕　岡田茂久、大槻貞従、上島和彦、古市昌造、和田良一、大槻雅弘

〔コースタイム〕

11月3日　京都6:15－10:50車止 11:15…11:30第1堰堤…11:40昼食12:05…12:31 2段の滝…12:45尾根取付…13:53稜線…14:05鞍部…14:37△三角点越山 1129.3m　15:05…15:55第1堰堤－16:30テント地

11月4日　起床5:00～テント地6:20－大郷谷出合6:50…7:10第5堰堤…7:30第1の谷の分岐…8:05第2の谷の分岐…8:15第3の谷の分岐…8:25第4の谷の分岐…9:10尾根取付…10:10稜線…10:32△三角点能郷白山1617.3m　11:20…14:23車止－温見峠－福井－20:45京都

第1512回例会

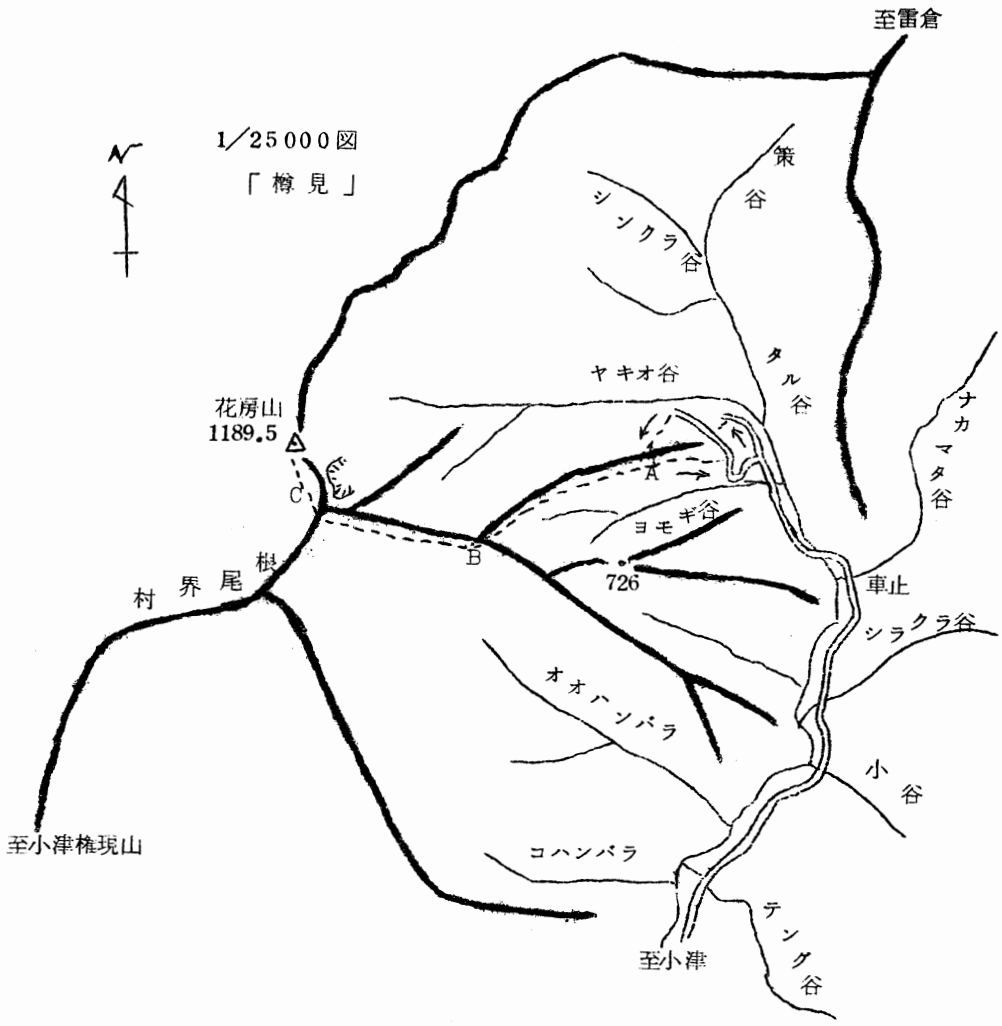
花房山

田中忠久

山変会刊行の奥美濃に「花房山には登山道はない。…無雪期ならば小津の部落から往復十数時間を覚悟せねばなるまい」とある。1976年5月2日　宮後さん、牧さん、武田さんの強力メンバーが登り3時間45分、下り3時間の快ピッチで花房山を手中に納められている。意気揚々と引き上げられる様子が部報№284に詳しい。1962年9月23日　伊藤さん、大沢　泰君、北村洋将君が小津権現山から縦走されている。実にすばらしい記録だと思う。

今回、上島さん、三橋さんの同行を得て待望の花房山に登る事が出来た。往復十時間近くかゝったけれども、すばらしい山頂の展望と共に忘れられない山行の一つになった。

11月25日　3時に上島さんに迎えに来てもらって、三橋さんを誘い、京都東インターに入ったのは3時半、関ケ原インターを出て、三橋さんのルート案内に従って走り、まだ寝静まっている小津の集落を通り抜け、高地谷林道に入り、ナカマタ谷出合に車を止めたのはまだ周囲が真暗闇の



5時30分であった。車内で朝食を済ませ、夜明けを待った。

6時20分に出発する。宮後さん達が靴を脱いで素足で渡られたタル谷は水量が少なく飛び石を利用して渡った。タル谷の右岸にさらに続いている林道を行くと、ヨモギ谷出合附近で左右に分岐していた。私達は右手の林道に進んだが、こゝは左手の林道を行くべきであった。

林道終点で右岸の山腹に取付き登って行くと、先程の左手の林道が回り込むようにヤキオ谷の右岸の上部に付いていて、その林道に出た。少し時間と体力をロスしたようだ。再び林道終点から右岸の山腹に取付いたが、尾根上のA地点まできわめて急傾斜の山腹で、落石に注意しながら1人づつ交互に登らなくては危険な程であった。1時間を要した。

A地点は檜の大木がよい目印になるところで、そこからはきわめて快適としかいゝようのない尾

根筋のヤブこぎが続いた。落葉季のせいか比較的見透しもよく、雷倉やタンボに見守られながら、堂々とした花房山に招かれて登って行くぜいたくさであった。

復路のために小まめに赤テープを付けながら登って行ったが、後に三橋さんから、ビニールテープを樹木に巻き付けるのを嫌う人があると聞いた。山が汚れるからだろう。目印はやはり枝折れくらいにすべきなのかも知れない。こゝろしたいと思う。B地点には下山時、通過しないようにと特に多くの赤テープを付けた。村界尾根（C地点）への取付きは〝ぎふ百山〟に「上部は屹立し喘登また喘登…」とあるようにかなりの急登を強いられた。村界尾根からは一息で展望のすばらしい山頂に立つ事が出来た。

みのほくろくの山々が一望である。伊吹山、貝月山、金糞岳、横山岳、金草岳、冠山、若丸山、能郷白山、屏風山等々が一大パノラマを見せてくれる。目前の小津権現山、蕎麦粒山、五蛇池山、雷倉、タンボもすばらしい。雷倉からタンボへ続く尾根に平行して林道らしいものが作られていた。帰路、高地谷林道のほゞ中間地点で車窓より確認した入口には鎖が張られていたが、徒歩ならさしつかえないものと思われるので、この林道を利用すれば雷倉、タンボの登頂は容易なのではないだろうか。未登の人にお勧めしたい。

山頂からは往路を忠実に下り、A地点からさらに尾根筋を下る事によって容易に往路の左手の林道に出る事が出来た。ヨモギ谷出合の左岸取付点である。車止に戻ったのは丁度16時で、途中、軽食をとったり名神の渋滞などもあったが20時前には帰宅する事が出来た。

〔参加者〕　上島和彦、三橋　勉、田中忠久

〔コースタイム〕

11月25日　京都東インター4:30 関ケ原インター5:30 ～6:20 高地谷林道車止…6:55
ヤキオ谷右岸取付…7:55 A地点…9:20 B地点…10:55 村界尾根…11:15 ～11:25
鞍部休憩…11:35～12:15 花房山…14:05 B地点…15:00 ～15:10 A地点…15:45
林道（夕陽に映える山稜が美しい）…16:00 ～16:15 車止－19:20 京都東インター

（村　宗松氏　退職記念登山）

丹波　鹿倉山

河　合　秀　晃

11月23日、今日は村宗松氏の退職記念登山の日である。勤労感謝の日でもあり、長年京都市民のために働いてこられ、この10月に四条駅の主任をめでたく退職、第二の人生を歩まれることになった村さんにふさわしい登山日となりました。

当日集合時間の7時に、交通局前に着くと、すでに岡田部長ら10名ほど、しばらくすると大木さんと、かわいい娘さんら20名（女性6名）が村さんの退職を祝って集合。7時15分局前を5台の車で出発。車には無線機を取り付けて互いに連絡をとりながら一路、丹波鹿倉山をめざして国

道9号線を走り続けました。亀岡市へ入ると濃霧のため視界が悪くなり、むこうでの天候を心配したが高地を抜けると晴れあがり一安心。8時３０分須知で約１５分の休憩をとり、車から降りたってみるとかなり肌寒く、缶コーヒーを買って体を暖めている人が多く見られました。

やがて目的地付近の菟原へ入り、鹿倉山の管理をしておられる方の家へ入山の了承を得た後、深山林道へ着き鹿倉山をめざして各人登山の準備。山頂では村さん退職記念のセレモニーのため缶ビール、コーヒーをつくるためコッヘル、水、鍋等を持っていくことになった。１０時に登山開始、狼谷をつめてゆくと台風の傷跡が深く残っていて倒木が谷を多くうめていた。沢になっている所では水に太陽の光が反射してキラキラ輝き、石清水の音も快く心も軽く高度を順調にかせぐ。しかし浮石が多いため何度か足をすくわれてヒヤッとしながらも谷をつめ、ブッシュをかきわけて突き進み１１時に三等三角点５４８mの山頂へ到着しました。頂上から四方をながめると秋晴れの空の下、360度、遠くの山々まではっきりと望むことができ、先ほど車で通り抜けた三和町が足元に見えて、春のような陽気とあいまってウキウキしたような気分だった。

さっそく岡田部長の音頭で村さんの退職を祝ってビールで乾杯、村さんへカリマーのザックを記念品として贈り、村さんから山岳部へビギナーの為の冬山装備等の寄贈の目録が贈られた。今回の退職記念登山には４０名の賛同者を得、すばらしいセレモニーであった。この後みんなで記念写真を撮り、そして皆が待ちに待ったコーヒータイム（セレモニーよりも？）にするために鍋に水を入れてコッヘルで湯を沸かすことになった。もうそろそろ良かろうと沸き上がる湯を見てコーヒーを入れようとしたところ、だれもコーヒーを持って登ってこなかったことが判明した。下ではコーヒーを沸かそうと言っていた誰かさんも持ってこなかったため、どうすることもできない。それでも紅茶を持ってきた者と数人分のインスタントコーヒーを持ってきた者がいたので、それで急場をしのいだが、２０人で分けたコーヒーは超アメリカンの味ではあったが、なかなかの美味であった。

１２時下山開始、天狗岩を経て下ってゆくことになったが急な下り坂で、落石しそうな大きな岩があったりでスリル満点。熊野権現を過ぎ、太平寺跡である庭園の遺跡を見てしばらく行くと大きなシイタケが２枚、白キクラゲ（中華料理の高級材料）ひとかたまりを見つけたので昼食の材料にとさっそく採取しました。

１２時５０分登山口に着く。さっそく昼食の主役であるブタ汁を作るための準備に取りかかった。女性は野菜、肉の調理、男性は水くみ、鍋で湯を沸かしたり合せ味噌作りをする。最初に味噌を入れダシの袋を入れてからブタ肉、ゴボウ、シイタケ、ネギ、大根などを鍋からあふれ出るほどつめ込んでボリュームたっぷりのブタ汁が出来上った。食事をした場所は山陰にあたる所なので、アツアツのブタ汁は冷えた体をホカホカに暖めてくれた。またモチ入りのぜんざいや頂上で飲めなかったコーヒーも、ここではたっぷりと飲むことができた。とにかく夕食はもういらないほど腹がふくれた。ブタ汁に山道で採ったシイタケ？も一緒にほうりこんだが、食べた後もだれも体の変調を訴えなかったので一安心。スズメバチの巣と思われるひょうたんの下半分の形のものが山のがけっぷちの岩肌にぶらさがっているのが見えた。かなり大きなものだったが遠くにあるため危険はなかった。2時１０分昼食が終って後始末をすることになった。大きなビールの缶は石をぶつけてつぶし

かさばらないようにし持ち帰る。集ったゴミは袋詰めにして津田さんの車に積むことになったが、津田さんは後ろから丸見えでカッコ悪いと云ってボヤいていた。最後に村さんへの寄せ書きをしてから車に乗り込み3時に出発し鹿倉山を後にしました。5時１０分に局前に着き山岳部の倉庫へ借出した用具を返した後5時３０分に解散しました。　皆様、御苦労様でした。

〔コースタイム〕

みぶ 7:15 ―菟原林道登山口 10:00…（根谷コース）…鹿倉山△ 11:00 ～ 12:00…

（北尾根コース下山）…車止 12:34 ～ 15:00 ―みぶ 17:10 解散

〔参加者〕

ＯＢ　奥村弘信、山村敏郎、津田　実、横井驤二

本局　石田　弘、方山宗子、原田加津子、三橋　勉Ｆ１、鷲見敏一Ｆ１、竹田　勉、大木秀実Ｆ１、楠とし子

高速　岡田茂久、村　宗松、辻久雄、河合秀晃、

ゲスト参加　立花治一　　以上　２０名

〔記念品賛同者〕

ＯＢ　近藤　薫、森下村重、伊藤潤治、坂井久光、河村　清、中村維源、石田和男

本局　大槻雅弘、三浦貞義、渡辺智生、宮川　勇、沢井佳三、上島弘子、山元誠一和田良一

高速　篠田勝美、矢野　聡、今井武夫、宮川康博、伊達寿一、出海洋三

梅津　吉田　武、　錦林　武田喜久郎　九条　田中史久

烏丸　大倉寛治郎　　以上　２５名

なお山頂で記念品としてカリマーのザックをお渡ししました。続いて村　宗松氏より山岳部長に山岳部備品寄贈の目録（アイゼン　5組）をいただきました。これで冬山装備も充実してきました。ありがとうございました。

鹿倉山敬老登山御礼

村　　宗　松

晴天を山の神にお願いした甲斐があって絶好の秋日和に恵まれました。私が遅刻しては申し訳ないと壬生へ一番に着きました。山頂で山の神に御神酒を捧げて丹波一円の展望台を満喫させて頂きました。大宴会の豚汁、ゼンザイと持って行ったニギリメシは食べられませんでした。

参加頂いた方、お世話して頂いた方ありがとうございました。そして、山岳部の皆様方より高価なザックを頂き誌上をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は、以前腰を悪くして3年程山行を中止したところ、「管動脈硬化症」と云う悪名を頂戴しました。お医者さん曰く「歩きなさい」の一言でした。それから北山を歩き廻ったところ翌年は見事パスしました。山岳部員に医者いらずを身をもって知らされました。今まで勤務の都合で皆様方と

御同行できませんでしたが、これから私の山行が始まります。記念に頂いたザックと共に宜しくお願いいたします。

第１５１４回例会

藤内壁　前尾根

川　原　傅　治

１１月２４日～２５日の２日間御在所岳藤内壁前尾根でロッククライミングを楽しむ。９月以来の山行であった。参加者は岡本義、井戸、佐伯、川原の４人。吉田、大倉の両氏は２５日から２６日にかけての山行となる。

行程は、２４日の午後、局を出発し御在所の駐車場に４時すぎに着き、藤内小屋の上の幕営地点に５時すぎに着く。夕食等は早ばやに済ませ、明日の登はんに備える。多くの人を予想していたがあまり多くではなかった。天候は出発の時から雨のばらつくあいにくのものだった。

２５日は、朝５時に起き、６時５５分テント地を出発。前尾根のテスト岩で練習後、７時４０分Ｐ７から登はんを始める。登はんは、２班に分かれて行う。１班　岡本、井戸。　２班　川原、佐伯。最初に岡本さんがトップで登り始める。井戸さんは初めてなのでもたつく場面もあったが、順調に登る。しかし、またここで私がミスをする。トップで登り始めて１番目のハーケンにザイルをかけた直後に落ちてしまった。幸い佐伯さんががっちり止めてくれたので、怪我もなくて済んだがびっくりした。　４年くらい前に１度落ちているので２度目ということになる。佐伯さんも４週間前に確保の練習をやったばかりで、感覚をしっかり覚えていたので、もののみごとに止めてくれた。（御世話をかけました。）Ｐ７の後半はそのまま継続して４人とも登りきる。

Ｐ６は、私が最初に登り始め、岡本、佐伯、井戸の順で登はん。風が強く、手がかじかんで、苦労する。途中雪まで降り始め、寒さに驚く。風がどんどん強くなり、早く降りたいと思った。Ｐ６はチムニーがあるが、そこはパスした。

Ｐ５は、前回トラバースして記憶になかったが、岡本さんと佐伯さんが覚えていたので概要はわかった。それでやっぱりトラバースする。

Ｐ４　ちょっと長目のコースで２ピッチで登る。前回のコースを２班が、尾根のコースを１班が登る。さすが義弘さんだと感心したし、井戸さんもよくやるものだと思った。

Ｐ３では、５～６級クラスといわれるフェイスをクレッターシューズで登るつもりだったが、自信もなくなっていたし、風が強くなったので、一般ルートを選ぶ。Ｐ２とＰ３のコルに着いて確保している時、風で飛ばされそうになる。セルフビレイが役にたつ。ここで、今回の登はんを終え、下山にかかる。時間は１１時１０分、３時間３０分の登はんであった。テント地に戻り、昼食をとり、２時に駐車場を出発。局に４時くらいにもどる。初めての井戸さんを加えての山行であったが食事のメニューも色々変わったものがあり、楽しかった。それにしても佐伯さんがうまく止めてく

れたことを感謝する。2回目の藤内壁前尾根であったが、1度目より楽しかったことは確かだった。最後に食糧と車で御世話をかけた岡本さんどうもありがとうございました。また、藤内壁へ行きましょう。

巻機山の秋

木原　滋

巻機山はよい山です。僕はこの山の写真を見るたびに、はるかな昔の物語を夢見ていつかは行って見たい、と思っていました。山の友を誘いましたが、越後は遠いと云うイメージがあるのか？2000mより少し低いのが気にいらないのか？　なかなか返事がもらえません。10月9日　22時56分〝急行　きたぐに〟で京都を出発。とうとう1人で出かけて来ました。長岡の町を歩いたり、六日町では越後の名刹「雲洞庵」へより道をしたりして、10日の13時30分に登山口の清水に着きました。民宿「中屋」へリュックを置いて登山コースを見に行くと、今日は祭日のためか何組ものパーティが山をおりて来ます。距離の近い旧道を通ると約30分で林道の終点につきます。コースは二つに分かれますが、巻機山は沢コースがよいと聞いていますので、一応沢コースを見て来ようと左の樹林の中を登ります。約30分で又道が分かれますが、両方共に中間点の天狗岩の下で合流します。左の割引沢におりた所で、今日は引き返すことにしました。宿の人の話では、巻機の沢の中で、米子沢（コメゴサワ）が最もスバラシイ所だそうです。米子沢は登高禁止になっているのに入って行く人が相当あって、毎年遭難する人が何人かあります。

地元の塩沢町でも一度見ておく必要があると、この宿の息子さんも含めて登りましたが、本当にスバラシイ谷だったそうです。僕は相当ビビリなので安全な桜坂コースを行こうと思いましたが、「ヌクビ沢はペンキでルート標示がしてあり、注意して行けば大丈夫ですよ。」と云われて、「やっぱり沢コースを登ろう。」と決定しました。

10月11日　6時出発。7時に割引沢におり少し行くと吹上げの滝を左にまきます。沢では何回もひどい目にあっていますので、さすがにキンチョウして来ます。ペンキのしるしはあるのですが、水の多い時にコースが変わるのか、足の長短の関係からか、スベリ落ちそうです。やっとのことで藍瓶ノ滝をすぎて8時25分に天狗岩の下につきました。ここで渡引沢とわかれて右のヌクビ沢に入りますが、紅葉した谷をきれいな水が流れていてガンバッテ沢コースを来てよかったと思います。ここまで来ると、まだ残雪があります。真ん中を水が流れて空洞になっているので上は歩けず、高まきをするのに苦労をします。小さな滝と急な登りが何ケ所かあり、沢の水が消えて右へ稜線を登ると一等三角点のある割引岳もすぐ近くにあります。11時20分、割引岳1930.9m　登頂。巻機山にはこのピークと巻機頂上と云われている1960mの中央ピークと、その向こうの牛ケ岳1961.6mとそれより少し低い草原のユッタリした稜線が遠く谷川岳まで続いています。登っ

て来た清水方面の沢は見事に紅葉しているし、反対側には越後三山が立派な姿を見せ、燧、至仏、平ケ岳、会津駒等なつかしい山々をながめながら草原の道をのんびりと歩きます。池糖のそばでゴロッとしていると、牛ケ岳方面からヒョッコリと単独行の人が現われました。「どちらからですか。」との問いに、「京都です。」と答えると「浜松の方の者ですが、京都の人ならサカイさんを知っていますか。」と聞きます。伊藤さんも知っているそうで、エライトコロで坂井さんの仲間に逢うものだ、とビックリしました。少し下って13時10分に巻機小屋に着きました。この小屋は、すぐ前に問題の米子沢があり、その後にきれいな頂上稜線を見渡たす良い所にあるしっかりしたヒナン小屋です。ここから10分ほどは登りになり、頂上方面の展望とおわかれすると桜坂方面への一直線の下りになります。しばらくは草原で展望がありますが、間もなく紅葉した樹林にはいり、途中には登って来たヌクビ沢の全望も見えて、16時05分に中屋に帰着しました。10月12日、7時13分のバスを沢口で乗換えて7時52分に六日村着。今日は土合から谷川岳へ登る予定でしたが、雨が降りそうなので高崎から上田に出て、別所温泉へ行くことにしました。塩田平の古寺を歩きまわって別所温泉へ一泊し、長野から中央線で13日の16時25分、京都駅に着きました。谷川岳へ登れなかったのは残念でしたが、巻機山は思っていたとおりのよい山でした。

北関東の山旅

坂　井　久　光

11／22　新幹線ひかりに乗り名古屋で東京行普通列車に乗換え、23日早朝東京着。山手線に乗換えて上野へ、常盤線平行に乗り岩間で下車。愛宕山へ参詣道を登る。放射現象で冷え込みがきつく足が寒い。石段を300段程登り切ると山頂の社前に出た。一休みして又石段を下り西側の駐車場を通り林道を進むとハイキングコースの標識あり尾根筋に入る。雑木林で暫く西行して又林道へ。霜柱を踏み左に筑波山を望めて縦走し団子石峠へ出て一服。天気は快晴で山気は冷い。急坂を登り屏風岩を経て難台山へ。小祠と展望盤と三等△があった。小広いが展望は樹林で駄目だった。少憩後スズラン群生地を右に分岐し急坂を下り道祖神峠へ。こゝも前と同様車道がクロスし、洗心荘青少年野外訓練所へ車道と歩道が上っている。狭き門と書かれた歩道の門を通って荘の前を通り吾国山へ。車道へ出て暫く登ると登山道の分岐があり標識があった。

急坂を登ること約15分で社のある山頂へ。樽の下に一等△があり、社の後から筑波山や難台山加波山が一望出来る。こゝで昼食をとっていたら、洗心荘の増築工事の人達が上って来て「何処から来た」「京都から」と云うと吃驚して「何故」とのことで傍の一等△を指差して理由を説明すると吃驚して「地元にこんなものがあるのに気がつかなかった。成程そうか」と感心して下山して行った。食後西へ下山、椿へ出て福原へ。水戸行に乗り、乗換えて日立へ。駅前でバスの便を尋ねて高鈴山へ。時間が遅いので夜行登山の心配があったが、バスの便があったので向陽台へ東河内行バ

スに乗った。トンネルを出た峠で下車。途中谷川沿いに日立鉱山のアパートや住宅が並び、日立鉱山の盛況を垣間見た。日が暮れかゝった林道を辿り標識を辿って谷添いに登り尾根道に出た。2㎞余りだが三つ程コブがあり結構登り下りがあって簡単ではなかったが、無線塔の立つ山頂へ着いた頃はとっぷり暮れて日立の街の灯が美しく見えた。今日はこれで三つ目の三角点だ。少憩後すぐ下山。折よく終前のバスに間に合って日立へ。駅前近くの旅館で最初の1泊。翌日一番の水群線・列車で大子（ダイゴ）へ。駅前バス停から蛇穴行に乗り終点で下車。谷奥へ行き林道（舗装）の登山口から登ったが、杉林の中の近道を急登して登った。中程で車をヒッチして山頂へ。三角点は八溝山神社の後にあり昔此の辺りから金がとれたので奈良朝時代に神社が出来たとか。標高1，022m残雪少々、風強く寒さ酷しい。福島・茨城・栃木三県境にあり、少憩後下山。展望は空しかった。

西金の湯沢温泉の分岐迄、笠岡の人の車で便乗して別れ、店でコーヒーを飲んで久慈男体山へ。途中ヒッチして登山口の大円地へ。健脚コースをとって嶂壁の肩へ登ると滝倉からのコースと出合い岩尾根の踏跡を攀登り雑木林の急崖を登って道に出て鎖の急坂を登りつめて山頂の一等△へ、標高654m なれど大円地の南へ急崖の品である。

小祠や展望台あり、少憩後大円地越コースをとって下山、峠は広く休憩所があった。この辺りから日が暮れかゝり急坂を谷へ下る。始めは道が落葉が白くてよく判ったが、杉林に入ると暗くて先が判らず難儀した。カメラと水筒のみで荷物を大円地にデポして来たのがくやまれたが後の祭り、枝を拾って杖とし俄盲のかなしさで1㎞程を小一時かゝってやっと大円地に戻った。農家で温泉へ電話してもらったが二軒とも満員で仕方なく西金へ向った。途中車に拾われ西金から水戸へ、駅前旅館1泊。11／25、国鉄で小山へ。鹿沼へのバスがあるとのことでバスに乗ったが、乗換えで時間がかゝった。栃木へ行き東武電鉄に乗るのが正しかった。

新鹿沼駅前でバスを待っていると、中年の男が「何処へ行くのか」と話かけて来たので「羽賀場山へ」と答えると「何処か、私はこの辺の山なら殆んど歩いて知っている」とのこと。近くの茶店で話をした。話に依ると坊さんで、附近で沢山信者があり、現在粟野町の奥地で御堂を信者に建ててもらっているとか。ジープがあるから送ってあげる、とのことで車に乗り片の道バス停附近の馬頭観音の前で駐車。二人で谷への木馬道を進む。山道を見付けて谷をつめ尾根を急登して尾根筋に出て一等△のある774．5m の羽賀場山へ。北に鶏頂山や釈迦ケ岳がくっきり見え、先月福本とあの裾を車で登ったことを思い出した。赤城山は雲でかくれていたが、北方は展望が展けており、南は林であった。SHCの標識や登頂記念標が木にあった。持参の弁当のすしを2人で分けて少憩後下山。すっかり打ちとけ、御堂へ案内するとのこと。新鹿沼へ引返し外車へ乗換え思川沿いに飛す馬置部落の先で駐車、杉林の急坂を登る。途中に柿の種のある熊の糞があり、何の糞か私に尋ねたすぐ上の峠状の所に鳥居があり、小広い平地に新しい土台と屋根が葺かれた可成り広いお堂に数人の信者が働いていた。皆に私を紹介して皆と一緒に下山、三台の車で新鹿沼の信者の食堂喫茶へ行きビールや夕食を御馳走になり、駅迄車で送ってくれた。その晩佐野の旅館で一泊。翌26日東武電鉄で栃木で乗換え葛生へ。大鳥屋山693m 一等△を登りに向ったが、地元の車をヒッチした迄はよかったが、越沢から登る道があるとのことで三叉路から右へとのアドバイスが判らず、谷奥から

急崖の踏跡を急登して尾根に登ったが、道が判らず帰りの時間が気になって無理するのもつまらぬので杉林の谷を急下降して高谷へ出てヒッチして田沼へ。東武電鉄で浅草に出て田中会員を呼出して東京駅で会食し、今回の山行を話し、先日の佐渡の思い出を語り合って土産を頂き、見送りを受けて新幹線で同日夕刻帰京した。

因みに羽賀場山で会った坊さんは、渡辺漂然と云う慶大医学卒のインテリで、羽賀とは鳥取（モチ）の意とのことで帰って調べるとその通りで、羽賀場山は鳥モチ取の山との意であった。

〔コースタイム〕　１１／２２　20:29 京都－21:17 ～ 21:31 名古屋－　２３日　4:40 ～ 4:42 東京－ 4:52 ～ 6:00 上野－ 7:41 岩間－ 8:25 ～ 8:30 愛宕山－ 9:40 ～ 9:45 団子石峠… 10:35 ～ 10:45 難台山△ 553 … 12:00 ～ 12:35 吾国山一等△ 518m … 13:35 ～ 14:05 福原 14:40 ～ 14:52 水戸… 15:27 ～ 14:20 日立… 16:55 向陽台 17:35 ～ 17:40 高鈴山△一等 18:20 ～ 18:28 向陽台… 18:59 日立駅 20:00 一泊

１１／２４　6:30 ～ 6:59 日立… 7:31 ～ 8:09 水戸… 8:28 ～ 9:18 上菅谷… 10:27 ～ 10:37 大子… 11:38 蛇穴… 12:50 ～ 13:05 八溝山△ 1 等… 14:52 ～ 15:00 西金… 15:15 大円地 15:30 滝倉コースとの出合… 16:15 ～ 16:30 男体山一等△… 17:55 ～ 18:00 大円地… 18:48 ～ 18:59 西金… 20:16 水戸　泊

１１／２５　5:58 水戸… 7:14 ～ 7:55 小山… 9:20 ～ 10:15 新鹿沼… 10:35 片ノ道羽賀場登山口… 11:40 ～ 12:10 羽賀場山一等△… 13:10 片ノ道… 18:00 ～ 20:17 新鹿沼… 20:42 ～ 20:46 栃木… 21:05 佐野（泊）

１１／２６　6:26 佐野… 6:40 葛生… 7:00 越沢… 8:20 ～ 8:50 尾根筋ピーク… 9:40 林道… 10:20 高谷… 10:50 ～ 11:44 田丸… 12:10 ～ 12:19 館林－ 13:23 浅草－ 14:45 ～ 17:24 東京－ 20:15 京都

ラジオで歩こう

長岡京歴史ハイク 84

田　中　定　勝

主　催　長岡京遷都１２００年記念事業実行委員会

企画実施　ＫＢＳ京都　後援　京都新聞社、ＫＢＳ京都

今年　昭和５９年１１月１１日は奈良平城京から長岡京に遷都してちょうど１２００年目に当ります。１２００年前この地は日本の中心でした。それぞれの想いを胸に約９キロの歴史ハイクを心行くまで楽しみ乍らラジオを持ち、イヤホンを耳にいれながら二市一町の代表的な名跡を訪ね歩こうというものです。

集合場所　向日市大極殿公園　　特別ゲストに紙ふうせん、２名が参加

スタート時間　午前１０時　　放送時間　午前１０時～午前１０時１０分

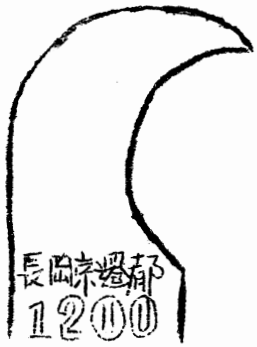
〃　午前１０時５０分～１１時５０分

スタート前にＫＢＳ京都出口常務の挨拶があり、続いて浦辻係長の交通ルールを守っての話があった。

コース紹介　大極殿跡スタート、桓武天皇の延暦３年（７８４）から１０年間都であった長岡宮跡、大極殿、小安殿、内裏内郭築地回廊などの遺構や、木簡などの遺物が発掘され国の史跡に指定されている。

石塔寺…乙訓寺…光明寺…長法寺…叡照院…長岡天満宮（八条ケ池）…ゴールは大山崎町観音寺（山崎聖天）

主な曲り角には歴史ハイク８４とした旗印が建ててあるので、案外楽であった。一応、長岡天満宮がゴールですが、健脚の人には大山崎へ。今日の参加人員は３００人と言われていました。



シンボルマーク

愛宕さん

畑　照人

１０月２２日　９の参り　気温９°　　１０月３１日　１０の参り　気温５°

１１月　５日　１１の参り気温１５°

特に記する事柄はありませんが、何時来ても参拝する人のあるのには感心します。幼児を抱き、或いは背に負い、夫婦協力して上る姿は見るもほゝえましい風景です。それと腰の二ツ折れに曲った老人。余程心信の深い人ですね。大いに見習わなくてはと思いました。５日のお参りは汗が出て出て困りました。その筈です。１５°でしたからね。九条工場のお火焚祭の御祈願の人々に会いました。下りに７合小屋で休んでいた時です。向うから声をかけられてビックリです。毎年８日の日でしたが…。天気が良いので今日にしたとか。御健康でよろしいなと挨拶されて、恐れ入ります。

武奈岳

１０月２９日　小雨

湖西線車中から山裾を見ると虹が立っている。実に美しい。久し振りだなあ。山は雨だんべ。比良駅下車、連絡バスが直ぐ出る。「今まで雨降っていたが、あんたらは運が良い。これからは雨止むよ。先に来た人は雨で引返して行った」とのことである。リフト・ロープウエイと乗継いで紅葉の山々を眺めながら八雲湿原帯へ着く。雨は上った。玉置さんの一行を案内した当時を思い出す。

同行の人、比良山は全く初めてなので御機嫌である。特に湿地帯の様子には感動したらしい。信州まで行かんでもこんなに近くにこんな良い所があるなんて、一度孫達を伴れて見せてやりたいね。草や木にも名札がつけてある。植物の好きな人には参考になる。武奈へ向う頃から少し雨降る。がホンの少々だ。下って来る人に尋ねると頂上は雨風が強いですよ。視界も悪いね。どうする。引返すかな。折角来たのやから大雨になるまで行く、と相談が決定。昼食に駅弁の松茸飯をパクつく。雨小止みとなり、勇気百倍、頂上目指して歩く。先客パーティーあり。頂上着記念写真とる。うまく雨晴上がる。引返さなくてよかったね。然し雲行が怪しくなったので早々に下山する。又々小雨にあい、発車寸前のロープウエイに飛び込む。下界は晴れている。リフトに乗換えたら雨が止んだ。リフトの下の道には、リンドウとセンブリの花が咲いている。秋ですね。「私はお天気女やから、旅に出ても雨にあったことは無いのや。」 えらい鼻息でした。リフト前から比良駅まで歩く。天気快晴となる。振返り山を見るとガスっていた。"視界ゼロ　それでも楽しい　秋の山"

同行者　一名

大　文　字　山

11月29日　晴

大文字さんへも久しく行ってないので、初冬の景色如何？と上って来た。登山道を落葉かきで清掃してくれてる人あり、御礼の言葉で挨拶、清々しい気持である。大師堂でお灯明を上げていると犬と散歩に来る人あり、やっぱり山はよろしい、谷の地蔵さんでおみくじを引いたら、ラッキー（吉）を当て大いに気分良好。水大神へ参るが、雨不足で谷水も流れず大神の湧水も全然無し。モリアオガエルの池も来年が心配である。今日は山科方面へ下ることにした。途中で私と同年輩と見られる男性にあい、暫時山の話に花咲かす。歩く事が健康保持の一番である。この意見は一致である。大いに歩く事を約束？して別れた。山科聖天さんと毘沙門堂の紅葉がとても良かった。境内はカエデの木が多い。最盛期に来たらよかったと思う。時々お参りしたが、今日は新らしい発見？だった。矢張り来た甲斐があった。

例　会　報　告

例会No.	目的地	月日	天候	担当者	参加者	記事
1512	美濃の山 花房山	（変更） 11月25日	晴	田中　忠久	上島　和彦 三橋　勉	51年5月の宮後さんの記録を参考にタル谷の支流ヤキオ谷の林道終点から尾根にとりつき、ヤブと戦い約5時間で展望のよい頂上に立つことができた。 別稿報告

1513	村宗松氏 退職記念 登山 鹿倉山	11月23日	晴	岡田　茂久	村、奥村、山村、津田横井、石田	老ノ坂峠を越えると一面の霧がたちこめて視界が悪かった。しかし現地到着の頃、快晴となり地元の区長さん宅で山のようすを聞き、全員元気に谷コースを1時間で頂上に到着。展望のよい山頂で退職お祝いのセレモニーをやり、車止に下山後ブタ汁とおぜんざいで満腹になり楽しい秋の一日を過しました。
				鷲見F1、靖、方山、辻原田、大木、幹子チャン竹田、河合、三橋F1（ゲスト参加）立花 以上　20名		
1514	鈴鹿 藤内壁	11月24日 ～26日	晴時々しぐれ	川原　傳治	岡本義、佐伯、井戸吉田、大倉台川	寒波のため、冷たい岩と風でのロッククライミングであった。 別稿報告

雑　　報

12月集会報告

12月7日（金）　本局会議室

出席者　OB　畑、奥村、河村、坂井
本局　大槻、和田、三橋、鷲見、方山　高速　岡田
九条　古市、田中　梅津　吉田　以上　13名

例会報告
- 花房山　木立の葉が落ちて見透しもよく山頂の展望がよかった。　報告　田中
- 鹿倉山　狼谷コースのガレ場を直登し、好展望の山頂であった。　報告　岡田
- 藤内壁　氷寒日のため前尾根P7～P3までの岩峰を登り早々に帰洛した。　報告　吉田

公認指導員検定のための講習会が岳連主催であるが、その講習会に参加するだけでも意義がある。自然保護の立場から山の木を折ったり、けずったりすることや、ゴミ処理の問題、キャンプ地では水位帯をはずして幕営するとか、いろんな問題について考えさせられることが多い。

装備係から　アイゼン10組、ワカン5組、コンロカバー等冬山装備の点検が出来ましたが、部品等なくさないよう注意して使用してほしいと報告された。

部費受領

11/27　西賀茂　横田義一　　12/5　市役所　山崎文夫、荒田又之助

帆布・濾布
テント・シート
雨合羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 801－5331（代）

西大路営業所
下京区西大路七条下ル
TEL 321－0251

愛されるスポーツ店

京菱運動具店

本店　下京区大宮通松原上ル
TEL（801）1331
十条店　南区竹田街道十条上ル東側
TEL（691）8041
伏見店　伏見区伯耆町西友ストアー4F
TEL（623）0824
山科店　山科区音羽野田町1番
西友ストアー山科店
TEL（592）9770内線228

一年中、山用品だけの
プロショップ

営業時間
午前10時～午後1時と午後3時～午後8時
（午後1時～3時は閉店させて頂きます）
<定休日>　水曜日

山・アウトドア　プロショップ

ログケビン　長谷川　博
京都市中京区御幸町通
蛸薬師南入
（四条河原町・阪急河
原町より徒歩約4分）
TEL 221－7569

真の専門店として
好日山荘は前進しております
山とスキー用具の
ことなら御まかせ下さい

確信ある用具を
確信ある価格で・・・

好日山荘
河原町六角下ル東入
TEL 241－1731

山の本

山岳書　電話ノ本にて
無料配送

ゆかり書房

075（801）8333

昭和60年1月1日

京都市中京区壬生坊城町48

京都市交通局内

京交山岳部

お知らせ
今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。
改築期間中（約1年間）は、本店2階にチロルコーナーとして継続営業いたします。

チロル

移転先　本店2階
京都市中京区西ノ京円町24
ダイヤ運動用品株式会社

HORI LIKE KYOTO
まかせて下さい…ネ
山とスキー
のことなら…

☆在庫豊富にとり揃えています
☆山の道具は　ぜと　御相談下さい
山とスキー専門店
ビッグ ホリイケ
河原町店　上・河原町通 丸太町東入
TEL 222－0363

御婚礼
御引越
ぎおん菊水
専門
ぎおん菊水運送株式会社
山科配車センター
京都市山科区西野山階町12－12
TEL (075)581－3101
本　社
東山区大和大路通四条下ル　541－2345
奥川営業所
中京区室町二条上ル　256－3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品
贈答品総合センター
厚生会指定
サンコー クラフト
西島輝雄
左京川端通丸太町下る下堤町88
TEL (075)771－3442

山とスキーの店
京都 あるむ
京都市中京区新町三条上ル
075－255－0288

HIKE & CAMP
この用具の事ならコニシが一番です！
御来店ありがとうございます
山とスキー レジャー スポーツ ショップ
そして
海の コニシ
中・二条通河原町西　TEL 231－1202